

第4章

Vitality affect の検討

本章では形としては捉え難い、ワークショップ体験の感性的な位相を捉える視点として感性的コミュニケーションを媒介するスターンの vitality affect の概念を詳しく検討する。

1. 情動の力動的な「感じ」

スターンは乳幼児が未だ言語による理解やコミュニケーション能力が未発達であるにもかかわらず、どのように外界を感知し認識するのかを考察し、感覚や認識を統合する自己感の形成について研究した (Stern, 1989)。スターンは乳幼児が関係する他者や事象を知覚し、刻一刻と変わる対象や状況の変化の中に不変的な自己や対象の統一感を見出すことができるのは、言語や認識としては名づけられない無様式な知覚体験を、ある「感じ」として知覚体験するからだとし、その無様式な「感じ」である力動感を vitality affect と名付けた。乳児は様々な情動を力動感 = vitality affect として感じており、これは単に乳幼児期にのみ成し得る前認識的な知覚体験であるだけでなく、人間が生きている中で止むことなく絶えず感受され続けている基層的な知覚領域だという。Vitality affect は情動に備わっている力動感（質感）ではあるが、情動そのものではない。そのことをスターンは乳児の世界体験の三つの特性を述べる中で次のように示している (表 4-1)。

スターンはまずカテゴリー性情動と vitality affect の違いを「ほとぼしり (Rush)」を例に説明している (Stern, 1989)。スターンの説明によれば、感

表 4-1 乳児の世界体験の三つの特性

- 総括的な無様式知覚
知覚様式—交叉能力に関する、力、強さのレベル、動き、数、リズムなどの人や物体の特徴は、総括的な無様式知覚という特性として直接体験されるものである。
- カテゴリー性の情動
怒り、悲しみ、幸せなどのカテゴリー性情動として直接体験されるものである。
- vitality affect
人との出会いによって直接起こってくる生氣情動として直接体験されるものである。

情には「喜びや怒り」などのカテゴリー性情動と、明確な概念では示し得ない広義の情動があるとする。例えば「喜びや怒り」のどちらにも、情動の「ほとぼしり」が知覚されることがあるが、「ほとぼしり」とは、光の氾濫、加速度的に起こる思考連鎖、音楽により誘発される測定不可能な感情の波などにおいて類似する、「ほとぼしり」という神経発火による変化として感じられる特性であるとする。そうした情動に共通する「ほとぼしり」という力動感に当たるものが vitality affect であり、カテゴリー性情動であれ広義の情動であれ、共通する「感じ」としての力動感が vitality affect なのである (p. 67)。既知の名づけられた特定のカテゴリー性情動に着目するのではなく、曖昧で未だ名づけられない「感じ」ではあるが、力動感としては確かに感受されるという、非特定の無様式の知覚体験の層において事象やコミュニケーションを捉えることができる手がかりとなる概念なのである。

喜びや怒りなどの明確な感情にも一瞬毎に異なる vitality affect がある。言葉にならない、時には自分でも自覚していないような、その場において浸っている情動の力動感や調子といった質も vitality affect である。いわば行動や存在の状態 (How) を捉えて示す際に、常にその「感じ」の力動感として vitality affect は知覚されるのである。




2. 形としての vitality affect

Vitality affect が常にどのようなコミュニケーション過程にも存在しているとすれば、それは時間的・空間的な流れの中に見出されるものだということの意味する。スターンは体験される無様式な情動の継時的な強さの変化は、「活性化輪郭 activation contour」(p. 69) (形を持った力動の感じ)として描写され、また、直接体験されるという。活性化輪郭とは感受される情動の「活性化」(感情特性と緊急性の量)の瞬間毎のパターン化された継時的変化のことである。具体的には人物の動きの活性化や生气、光や音の伝達などを表す、劇画の輪郭線として考えると理解しやすい(p. 69)。

しかし、vitality affect は知覚されはするが、具体的な形をもったものとして捉えることは難しい。ここでスターンはウェルナー (Werner, 1948) が相貌的知覚と呼ぶ、無様式知覚として知覚される言葉や事象の持つ表情の描画によって、こうした力動感を線描画での二次元的な表現として捉えることができるとする。幸せだ、悲しい、怒っている、などのカテゴリー性の情動を例にすると、表4-2のように知覚(描画)される(Stern, 1989, p. 64)。

例えば、「このリング、一つ食べてもいいですか」と尋ねられ、「いいですよ」と返答する場面を考えてみよう。「いいですよ」という発声を理性的コミュニケーションとして捉えれば、それは許可を表す意味の伝達である。一方で「いいですよ」と発する人の個別特殊性・感性的な側面(感性的コミュニケーション)を捉えれば、「いいですよ」という発声には発した人が今感

表4-2 感情知覚の相貌性の描画例

カテゴリー性の情動	幸せだ	悲しい	怒っている
相貌的な描画			

Stern (1989, p. 64) の記述を基に作表。